
とある少女と能力者狩り事件 《スキルハント》

MMR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少女と能力者狩り事件 スキルハント

【Nコード】

N9371K

【作者名】

MMR

【あらすじ】

学園都市で発生する

『能力者狩り事件』

失踪し、容疑者として名が挙げられた白井黒子

黒子の無実を信じ、動き出す御坂美琴、初春飾利、佐天涙子、固法美偉の四人に加えて例によって巻き込まれる上条当麻、五人の運命やいかに

超不定期更新なのでご容赦下さい。

ちなみに時系列は一切不明です。

1 (前書き)

超不定期更新ですが、頑張りたいと思います m (|) m

1

不幸だ。

同居人の暴食シスターの逆鱗に触れてしまい、命辛々逃げ出した上条当麻 は学園都市の公園のベンチに腰掛け、穏やかな休日の昼下がりをご過ごしていた

しかし、その平穏はこの一人の来訪者によって壊されてしまうだろうだからこそ上条はその人物から目を反らし、小さく呟くのだ
不幸だ。と

眼前に迫りくる中学生の見幕はとても険しく、会う度に毎度毎度同じような台詞を上条に浴びせる

「あたしと勝負しなさい!!」

名門である常盤台中学の超電磁砲と呼ばれる少女とのこのやりとりも一時は無くなった。しかしある日を境にまた復活したのだ

そのある日のことはまた機会があれば語ることにしよう

「……で？ 一体何の用だビリビリ？」

「だーかーらー……私には御坂美琴って名前があるの！！いいかげんに覚えなさいよ！！！」

そう言う美琴の体から放たれた青白い電撃を上条は気だるそうに自身の右手で受け止め、消し去る

そんなやりとりをした後、二人は同時に息を吐く

「……何でなのよ！ どうして私の電撃が通用しないの！？」

上条の右手には 幻想殺し《イメージブレイカー》 というものが備わっている

この幻想殺しは魔術であろうが学園都市が誇る七人のレベル5のうちの一人 御坂美琴 の電撃であろうと異能の力を打ち消してしまうのだ

ちなみに普段から不幸という不幸にまみれている上条は神の加護や運命の赤い糸などそういった類のものも打ち消してしまうからである

「……もういいだろ？ お前じゃ俺には勝てないの。分かったか？」

上条は立ち上がり、振り向くことなく手を軽く振りつつその場を後

にした

……そしてその直後に頭上を飛んでいた鳥から攻撃を受けた

「うわあっ！汚ねえっ！！」

「あっ！ち、ちょっと！！……行っちゃった……」

去りゆく上条の姿を見つめながら美琴はポツリと呟いた美琴は先程上条が座っていたベンチに腰掛けると携帯を手を取った

そして新着メールの受信がないかと確認する

結果は1件。しかしそれはメールマガジンで期待していたものではなかった

「黒子今頃何してんだろ……」

白井は数日前に仕事に出かけたまま帰っていない。メールは返らず、電話にも出ない。まさに音信不通なのだ

白井の先輩である固法に聞いてみるとあまりにも忙しく走り回っているためだと説明されたが、どうにも怪しかった

「はあ……」

美琴はため息をつくと空を仰いだ

2 (前書き)

敵キャラを曲者っぽく書けたかなあと思ってるんですけど……

どうでしょうか(・ω・´)(

太陽が完全に姿を隠し、薄暗い街灯の夜の明かりに街が包まれている中で疎らな人影の間を縫うようにして一人の男が走っていた

何かから逃げるかのように、必死に息を切らしながらも決して立ち止まらずただひたすらに走っていた

それもそのはず男は逃げているのだから

完全下校時刻を前にして下校していた学生の男は不意に後ろから声をかけられ立ち止まった

すると自分がいる通りにあるはずの服屋の看板が視界の端に見えた

「あれ……？」

辺りを見回してみると自分は先程まで歩いていた通りから道一本外れた路地にいたのだ

自分は道を間違えていたのかとも考えたが毎日のように登下校に使う道を間違えるはずもない。自分は知らぬ間に移動していた。

もしくは何者かに移動させられた。しかしその理由がわからない

そんな風に戸惑っていると薄明かりに照らされた前方から学生の男

の元に何かがやってきた

「今宵も苦痛と悲鳴の舞い踊る舞台、開演の時……」

その『何か』から発せられた女のような高い声に学生の子は自分の背筋が凍るような感覚を覚えた

恐怖に完全に支配されてしまう前に状況を理解しようと突如現れたその『何か』をよく見る。すると左手こそ存在していないが人の形をしていることが分かる

「だ、誰だお前!!」

男は不気味に笑いながら近づいてきた『何か』を威嚇しつつ、ジリジリと後ろに下がり始めた

しかし身体に激痛を感じ、その足を止めた。否、止められた。

見てみるといつの間にか右腕に銀色に輝くメスが深く深く突き刺さって紅い液体が滴っていた

「ぐああああああああああ!!」

激痛に顔が歪む、いつの間にこんなことになっているのかまったく理解できない

前方の『何か』は自分と距離が離れているので刺すことはできないように思える。だがここ学園都市ではそれを可能にすることができる

「能力者……学生……なのか?」と問いかけても敵は答えず、更に

攻撃を加えてきた

「ぐあああああああつ！！」

右腕に突き刺さる銀色が追加され、危うく意識を失いそうになる

「くっそお、相手が悪い」

男はメスを強引に引き抜くと自身の能力であるパイロキネシスを使い傷口を焼いた

先程よりも遙かに大きな激痛が男を襲ったが、男がこんな行動をとったのには理由が二つある。一つは止血。もう一つは痛みで意識をつなぎ止めること

どうにか意識をつなぎ止めた男は敵を睨み、手から炎の球体を『何か』に向けて放つと、一気に振り返り一目散に走り出した

「BGMは天国と地獄！敵から命辛々逃げる子ウサギのシーン！！」

直撃したであろう炎球が爆音をあげると同時に『何か』は叫んだ

「こゝ、ここまで来れば……」

「食物連鎖の理に従え。子ウサギは狩られるものだということを理解せよ。」

「……やっぱテレポーター空間移動能力者かよ。くそおっ!!」

逃げて逃げて逃げ続けたはずの男の前には左手の存在しないあの『何か』が立ちはだかっていた

「その絶望に満ちた表情……実に素晴らしい。だが、そろそろエンディングだ。」

『何か』は不適に微笑み、その手を男にかざす

「さらばだ被害者B。エンドロールに刻まれること、光栄に思え。」

周囲にドゴツという鈍く低い音が響き渡った

その音は男とコンクリートの地面がぶつかったことにより生じたものだった

男はいきなり数メートル上空に投げ出され、重力に従いそのまま落下し地面に叩きつけられたのだ

「(……触れてもいない俺を……空間移動させたの……か……)」

相手の能力に少々違和感を覚えながらも男の意識は今度は抵抗すらできずに徐々に闇へと溶けていった

「今宵の舞台はこれにて終幕……お代は結構。」

「畏怖の念を抱き、噂が流れ、あなたが震えて眠るなら……」

頭部から血を流して倒れている学生の男を見下ろしながら左手が存在しない『男』は女のような高い声で不気味に呟いた

3 (前書き)

一週間以上も更新間隔が空いてしまいました
(^ ω ^ ;)

のんびりですが温かく見守って下さいな m (_ _) m

3

第177支部所属の風紀委員 初春飾利は膝から崩れ落ちた

その原因は先輩である 固法美偉 から受けた言葉

「白井さん……いえ白井黒子を発見し次第その身柄を拘束せよとの命令が出たわ……」

ショックを隠しきれない初春に固法は続けていった

一週間前、白井黒子は失踪した。誰にも行く先を告げることなく、何の前触れもなく霧のように突然その姿をくらませた

そしてそれと同時に学園都市の各地で謎の能力者狩りが起こり始めた

能力者狩りは同時に複数地域で多発しており、犯人は複数名とされている

犯人の素顔を見た者は誰一人としていないが、被害者達は口を揃えて犯人は空間移動の能力者だと説明し、犯人は空間移動系の能力者集団と断定された

すぐさまアンチスキルやジャッジメントが事件の調査を行い、被害者に刺さっていた物を調査したところ

大半は釘やメスのようなものだったものの、その中の数個に白井が使用していた金属矢があった

白井の指紋がべったりと不自然なくらいに付着した金属矢が確かにあったのだ

このことから白井黒子はこの通称 能力者狩り《スキルハント》事件の重要参考人として警備員から身柄拘束の通達が出たのだ

常盤台の寮で同室の御坂美琴には白井の失踪に関しては伝えておらず、仕事が忙しく連絡も取れない状態にあると苦しい説明で誤魔化しているが、美琴はおそらく感づき始めていると固法は口にした

そこまで言い終わると固法は初春に視線を移す。初春は先程よりも小さく見え、小動物のように体を震わせている

「私だって信じられないけれど……」

固法は初春に優しく声をかける。すると震える初春から小さく声が発せられた

「……信じてない。」

「え？初春さ……」

「そんなの信じません！！白井さんは……白井さんは絶対に能力者狩りなんてしません！！」

普段大人しい初春が声を大にすることに固法は驚いたが、それ以上に初春の白井への信頼の大きさに驚いた

「固法先輩！私が白井さんの無実を証明して見せます！」

固法は初春の迫力に圧倒されていたが、徐々にその表情を和らげていった

「そうね……私も白井さんを信じてる。一緒に無実を証明しましょう。」

風紀委員第177支部は白井黒子の無実を証明するために動き出した「黒子が容疑者だなんて……」

扉の前に立ち、二人の会話を盗み聞きしてしまう形になった御坂美

琴は衝撃のあまり自身の耳を疑った

しかしすぐさま自分を律するように両の手で自分の頬を一度叩くと、
中に入ることもせずはどこかへ走り去った

4 (前書き)

本当に亀の歩みみたいな更新ですねえ……

大した量じゃないんだけどなあ (^ ω ^ ;)

「ということなので皆さんも帰り道にはくれぐれも注意して、あまり遅くならないように帰ってください。」

黒板の前に佇む教卓がそう言った

かのようにも見えるくらい背が小さい 月詠小萌 はれっきとした大人であり、上条たちの担任教師だ

現在はホームルームの真っ最中で、学園都市に多発している能力者狩り事件の概要説明と被害状況、加えてこの事件最大の特徴を小萌は説明したところだ

「いいか、能力者狩りに遭遇したら決して戦うな。逃げろ。」

そう注意を促したのは小萌とは対照的に長身の 黄泉川愛穂

教卓の横で腕を組み、表情を強ばらせている黄泉川は続けていく

「この能力者狩りではレベル4の学生の被害も報告されている。相手は相当な実力者だ。」

「お前たちでは束になっても勝てるかどうかだ！悔しいだろうが逃げなければ、無事では済まないと思え。」

シンとしていた教室をさらに張りつめた冷たい空気が支配した

「能力者狩りねえ……」

放課後の教室で教科書を手に持ち、帰宅の準備をする上条は呟いた

「かみゃん、そんな辛気くさい顔をしてどうかしたのかにゃー？」

鞆を手に持ち、机に腰掛けている 土御門元春 は上条に問いかけた

「いや、物騒だなと思ってさ……」

上条の脳裏にはとある中学生が浮かんでいた

「そのことなんだが……」

土御門は鞆をその場に置き去りにして上条に近づき、周囲に聞こえないように小さく耳打ちした

「白井黒子を知っているか？」

いきなり黒子の名前が挙がり、戸惑いつつも上条はうなづく

「その白井が今回の能力者狩り事件の容疑者の一人になっている。」

「んなあっ!？」

土御門の言葉に思わず上条は大声を上げてしまい、教室に残っている数名の生徒の注目を浴びた

「か、かみやんも見ればメイドがいかによろしいかが分かるぜい。」

土御門が若干額に汗をにじませつつひきつった笑みを浮かべる

上条はその笑顔から「声が大きいんだよこのバカ!」と土御門からのメッセージを受けた

5 (前書き)

更新速度を早めようとするのはあきらめました。

テストがなければ……なんて言ってみたり W W

5

「白井が失踪！？どういうことだ土御門！」

校舎に残っている生徒、教師も少なくなった学校の屋上で上条は溜まっていた土御門に疑問をぶつけた

「どうってそのままの意味だ。白井が行方不明になって事件の容疑者だって意味だよ。」

土御門は端的にそう言ったが、目は真剣なものだった

土御門元春は学園都市の暗部組織グループの一員である

今回の事件には上の命令で深く関わらないことになっているが情報くらいは耳に届く

土御門は白井を上条の知人と知っていたためこのことを知らせたのだ

「かみやん、俺は今回は表立って動けないが個人的に協力くらいならしてやれる。」

そこまで言って土御門は一枚の紙を取り出した

「ここに行け。」

「ここか……」

御坂美琴は薄暗く人の寄りつかないような裏路地にいた

この路地はニュースで見た能力者狩りの最初の現場である

美琴は「よし。」と気合いを入れると現場を観察し始めた

しかし

「特に収穫はなしか……」

小一時間ほど調べてみたものの、やはり既にアンチスキルが捜査済みで手がかりとなるようなものは何一つとしてなかった

「仕方がない、帰るか……」

美琴はあきらめて帰ろうとしたがふいに自分の後方から足音がしたことに気づき振り返った

「……誰？」

「こんなところでお会いするとは思いませんでしたわ……」

美琴は聞き覚えのある、それも今捜し求めている人物の声に驚き、振り返った

「くっ、黒子!？」

美琴の前に現れたのは失踪している白井黒子だった

「あ、あんた今までどこに行ってたのよ!？」

美琴の問いかけにも白井はなにも答えない

「見られてしまったからには仕方ありません……」

白井は金属矢を取り出すとそれを美琴に向けて構えた

「ちょっ！？黒子あんた一体何……」

美琴は言い終わる前に痛みで言葉を失った

白井の投げ放った金属矢は頬をかすり、ごく僅かだが美琴に傷をつけた

「く、黒子……？」

「次は……額に打ち込みますわよ？」

白井はさらに金属矢を構え、冷淡な眼差しを美琴に向ける

「一度だけ言います。今すぐここから立ち去りなさい。」

「……………」

美琴は驚きのあまり腰が抜けてしまった

「忠告しましたのに……」

白井は一つ小さく息を吐くと金属矢を美琴に向け、「さようなら御坂美琴。」そう言って矢を放った

「(……あ、足が動か……ない……)」

美琴は目前に迫る金属矢を見つめながら自分の中に走馬燈がかけめぐるのが感じていた。自分以外の世界が遅くなるようなそんな感覚

「(私……死ぬのかな……)」

普段の美琴であるならば避けることも、自身の能力で金属矢をどうにかすることもたやすい

だが絶望という感情がそうさせてはくれなかった

自分を慕い、自分も信頼していた者の裏切りは美琴の中であらゆるものを壊していった

美琴は自分が能力者であることさえも忘れ、ただ一心に死への恐怖に震えていた

風を切る音が徐々に近くなると美琴の目は静かに閉じられ、そこから一筋の滴がこぼれた

無情な金属の矢が肉を喰い破り、
真っ赤な血を滴らせた

6 (前書き)

どうしようもないくらいに時間がない (・ω・)

これからも更新間隔が大きく開くかも知れませんが気長に待っていただけると幸いです

m (m

ポタポタと紅い血がコンクリートに小さな池を作り、周囲に微かな鉄の香りが漂い始める

しかし御坂美琴は無事だった

金属矢が突き刺さったのは御坂の額ではなく一人の少年の肩だったからだ

間一髪のところでは御坂を突き飛ばし金属矢から救ったツンツン頭の少年は苦痛に顔を歪めながらも白井に目をやる

白井は上条の顔を見るや否やその表情をしかめた

「ちっ……上条当麻……」

白井は上条が言葉をかける前に恨めしく一瞥し、逃げるようにしてその場を走り去った

「あ、ありがとうございます……」

病院で頬の傷の手当を受けた美琴はひとまず上条の処置が終わるまで待合室で待つことになった

そして部屋の前までたどり着くと付き添いの看護師に震える声で礼を言った

しかしその目は焦点があっておらず、未だ心此処に在らずといった状態だった

そんな美琴を待合室の中で待機していた白井の同僚であり、先輩の固法美偉 はいつもとは明らかに様子の違う美琴を見てどう言葉

をかけるべきか戸惑った

看護師はその場を固法に任せて去り、固法はとりあえずその場にあった自動販売機から適当な飲み物を二つ購入し、一つを美琴に差し出す

それを美琴は受け取りはするものの、決して口を付けない

固法が意を決し、声をかけようとしたその時、美琴が小さな声で話し始めた

「黒子……どうしちゃったのかな……」

普段の強気な美琴の姿はそこにはなく、ただただ好意を寄せていた友人に裏切られ悲しみに暮れている女子中学生がそこにはいた

「御坂さん……」

固法は言葉をかけるつもりだったのにも関わらず、美琴の震える声を聞き、何も言えなくなってしまった

「くぅう痛ってえ」

静寂に包まれた待合室の扉が開き、治療を終えた上条当麻が空気も読まずにやって来た

しかしそんな発言にも美琴は反応を示さない

固法は心配ながらも美琴をその場に残し、少しは事情を話せそうな上条を部屋の外に連れ出した

「何か引っかかるんですよ。」

病院の中庭のベンチに並んで腰掛ける少年が真剣な表情で問いに答えた

「引っかかるってどういうこと？」

上条と白井は特別親しいというわけではない

上条は美琴と少し交流があるので白井という名前やその容姿は見知っていても、彼女の本質を上条は知らないのだ

上条は自身の言葉にも関わらず首を捻りながら固法の質問に答えるべく声を絞り出す

「なんて言うか……御坂を慕っているような奴が悪い奴には思えないんですよ。」

固法自身もその点に関してはまったく同意見であり、上条の言葉に黙って耳を傾ける

「それに御坂に対する白井の目つきが明らかにおかしかったというか……」

「でも洗脳されているような様子でもなかったように思えるんです。」

学園都市には洗脳と呼べる行為が可能な能力者も少なからず存在する
しかしそれらの洗脳には必ずと言っていいほど特徴が表れる

今回の白井に関してはそのような節はなかったと上条は洗脳説を素人ながらに棄却する

上条の言葉にある程度納得してうなづいていた固法だったが、それでも合点がいったというわけでもなかった

上条はそんな固法を見て自分にも残っている違和感の正体を引き続き必死に考えてみることにした

数分の時間をかけて一つ一つ白井との戦闘と呼ぶべきかも分からない対面を思い出していく

白井の金属矢に傷つけられた自身の肩の傷が少しうずき、顔をゆがめたその時

上条は小さなその違和感に、よくよく考えてみれば単純だったその答えにようやくたどり着いた

「能力……アイツ空間移動を一度も使わなかったんです。」

「使わなかったのか、それとも使えなかったのかはわからないですけど……」

「少なくとも本気の戦闘なら能力を使わないわけがないじゃないですか。」

固法は美琴のもとに向かってしまったので初春飾利は一人で頭を抱えて唸っていた

能力者狩り事件は未だに犯人とされるグループの足取りが掴めず、被害は増える一方だ

事件の被害者の中には死傷者こそいないものの、重傷者が多数

辛うじて軽傷で済んだ者も全て顎などを負傷しており、まともに会話をすることが出来ない

読心能力者が犯人像を読みとっても被害者は皆暗がりサイコメトラで襲われているために犯人の顔を特定することが出来ないでいた

「うーん……」

現状では一切進展を見せていない事件に風紀委員たる初春は深く頭を悩ませる

だがしかし何よりも彼女を悩ませているのは同僚である白井の行方が知れないうえに事件の容疑者になっているということなのだ

初春は大きくため息をつくとパソコンデスクから立ち上がり、先程届けられた資料が置かれたデスクの前に立つ

「よし。」

初春は小さく気合いを入れると集中力を高めて資料に目を通し始めた

何者かが自分の背後に忍び寄っているのも気づかないほどに

8 (前書き)

随分と感覚が空いてしまいました……

(´・ω・`)

お待たせしてしまって申し訳ないです

m (┐┌;) m

初春飾利の背後から息を殺し、気配を消して猫のように忍び寄る影があった

その何者かは集中し、一心不乱に資料と対面している初春の後ろに立つとニタリと不適な笑みを浮かべる

徐々に初春へと何者かの手が伸びていく、浮かべられたその表情は初春に触れるまでの余韻を楽しんでいるようにも見えた

数秒後、部屋にバサッという何か風の抵抗を受けて広がる音が響きわたった

その音と巻き起こった風でようやく自分の背後に誰かがいることを悟った初春は突然の出来事に思考が追いつかず、せめてもの抵抗にと大声を張り上げた

「きやあああああ！！」

「初春はまだ怒ってんの？」

「……怒ってませんよ。」

初春は少しむくれた表情のまま言葉を返す

「だいたい佐天さんはいつもいつも……」

お分かりだろうが初春の背後に忍び寄り、勢いよくスカートめくりというスキンシップを行った少女が初春の対面に座り、仲良く会話をしている

その少女の名は 佐天涙子 といい、初春や美琴の比較的仲の良い友人であり、もちろんのこと美琴の友人ということもあって白井とも親しい友人である

ちなみに事件のことはニュースで知っているものの、白井が容疑者であることは彼女はまだ知らない

「ところで佐天さん、今日はどうしたんですか？」

小さな怒りを静めた初春は佐天に問いかけた

すると佐天は飲みかけていた紅茶のカップをコースターの上に置いた

「用という用はないんだけど、何か初春のスカートがめくりたく…」

とここまで言いかけて佐天は自身の前方からのジトツとした視線を感じて口を噤んだ

「あ、そういえばさ初春、白井さんはどこかに行ってるの？」

佐天は初春の意識をどうにか移そうと藁にも縋る思いで話題を白井

のことに変えた

「えっ……」

対する初春は普段ならば他愛のない会話で済ませられたのだが、時が時だけにうっかりと一瞬ピクリと跳ね上がり佐天に違和感を与えてしまった

「（あれ？この感じは……）」

佐天はその違和感を見逃さず、ほんの数秒で考えをまとめるとフフンと鼻を鳴らした

「初春……白井さんは何をしたの？」

9 (前書き)

一話につき1000字を目標に書いていきます。

少ないように思えますが……精一杯です(^ ω ^ ;)

「ねえ初春教えてよ。白井さんは一体何をしたの？」

佐天は何も語ろうとしない初春にジリジリと詰め寄っていき、次第に部屋の隅へと追いやっていった

普段からは想像も出来ない威圧感を放つ佐天に完全な部屋の角まで追いつめられてしまった初春は焦燥から激しく混乱していた

自分は確かに佐天に対して違和感を与えてしまうような反応を見せた。それは認める

だがしかし、そのほんの少しの違和感だけで白井の一件に気づかれてしまったのだろうか

初春は後悔の念に刈られて冷静さを欠き、次に自分は一体どうすればいいのかが分からなくなってしまっていた。俗に言うメダパ〇状態である

「(ど、どどどどうしよう……佐天さんもしかして気づいちゃった！？)」

目が回遊魚のように忙しく泳ぎ回る初春の両肩を掴み、佐天はつい

に切り出した

「ねえ初春、教えてよ……」

「白井さんと喧嘩した原因は何なの？」

「ふえ？」

「だーかーらー初春は白井さんと喧嘩したんでしょ？その喧嘩の原因は何かって聞いているの！」

「白井さんも初春のスカートめくったの？」などと佐天は初春に質問責めを続けているが、当の初春には一切届いていなかった

安堵感とは初春の注意力を完全に奪い去り、注意力の欠如した初春の耳はまさに馬耳東風を体現し、右から左へと佐天の言葉を聞き流していく

「（よかったあ……バレてないみたい……）」

初春はホッと胸をなで下ろし、気づけば閉ざし続けていた口を開いていた

「もう佐天さん、驚かさないでくださいよお……」

初春の少し弱々しい調子の言葉に佐天は間の抜けた声を出す、初春はそれに気づくこともせずが続けていく

「白井さんのこと聞くから事件のことがバレちゃったのかと思ったじゃないですかあ……」

「……え？」

『油断大敵』

油断して注意力を欠いた間抜けな人間ほど失敗してまうと偉い誰かは言ったかもしれない

先人の教え通りに初春は難なく凌げたであろう危機の断片を自らの

一言で驚掴みにしてしまった

初春の言葉を聞いてからというものの佐天の目は興味津々と輝きを増している

こうなってしまうえば佐天は槍が降ろうとも、超電磁砲が放たれようとも、暴食シスターに噛みつかれようとも自身の障害となりうるすべてのものを薙払ってその真意を聞き出すであろうことを初春はよく知っている

それは彼女の長所ともいえる単純な好奇心から来るものなのだろうが、この一件に関しては極力佐天の耳には入れたくない

こんどこそ確実に危機を凌ぐべく慎重に言葉を選びながらも、自分の本当の失態に胃が痛くなるのを感じた初春飾利であった

「初春さん。あなたも風紀委員の一員としての自覚を持って、もう少ししっかりして！」

「はい……」

初春飾利は先輩である固法美偉の少し強めな言葉に深く反省した様子を見せる

なぜ初春が固法に注意を受けているのか。その理由は明白で

『機密事項の漏洩』

簡単に言えば自身の友人である佐天涙子に白井が関わっているとされる事件のことを話してしまったのだ

白井と友人である佐天にはいずれは話されることになっていたので罰や処分は下らないが、もう少し注意力と責任を持った一人前の風紀委員になってもらうべく、固法は心を痛めながらも先輩として指導を行う

そんな二人をそばで見っていた御坂美琴は顔色も戻って先程とは違った表情をしていた

「……どういふこと？」

「アイツは白井じゃない。」

絶望にまみれて普段の明るい表情を失い、身動きすらとれなくなっ
てしまった少女に対して少年はそう言い切った

「証拠を見せろと言われればどうすることもできないけどさ、お前
もそう感じていたんじゃないのか？」

そんな上条の言葉を補足するように固法は口を開く

「姿を真似る能力者ならデータベースに何人か登録されているし、
その可能性はあると思うわ。」

だがそんな固法の言葉を聞いても美琴の表情は未だ暗いままだった

「でも……」

そんな美琴を見て上条は俯いて震えている少女の手を取った

「……なら確かめてみるよ。」

「俺も手伝うからさ、もう一度アイツを探し出して、やり合って確
かめてみる。」

上条がつかむ美琴の手が少しばかり力を強める

「……お前は白井をどう思ってるんだよ。」

「お前にとっての白井はただの後輩だったのか？ 信頼に足らないような奴だったのか？」

上条は諭すように美琴に語りかける

「俺の知ってる白井は風紀委員として高い誇りを持っているような奴だ。そんな奴がその誇りを捨てるようなことするなんて考えられねえよ。」

上条のはっきりとした意志の込められた目が美琴の虚ろんだ双眸をとらえる

「私にとっての黒子は……」

美琴の口は知らず知らずのうちに声を漏らしていた

行き交う人も気にせず佐天涙子は公園のベンチで唸り声をあげる
佐天は運良くも固法たちが戻る数分前に177支部を後にして、公園でジュースを片手に休息をとり、頭を整理していた

「……やっぱりどう考えたって白井さんが能力者狩りなんてありえないよ。」

数分座り込んでいたベンチから立ち上がり、僅かばかりに残っていたアルミ缶の中身をクツと飲み干して佐天はその場を後にしようとした

しかし、後ろの茂みから何かが草をかき分けて倒れたような音が響いて後ろを振り返った

「し、白井さん!?!」

佐天の目に映ったのは自分のよく知る容姿の友人が血塗れで瀕死の重傷を負っているそんな姿だった

11 (前書き)

バトルシーンがうまく書けるようになりたいなあ
(・ω・´)

「白井さん!! 白井さん!! しっかりして!!」

佐天は紅く染まった友人の姿に驚きを隠せず、慌てて駆け寄った

佐天はいきなりのことと戸惑いつつも、ボロボロになっている友人の手を強く握った

「……今すぐここから逃げて下さい。奴らはすぐにここを嗅ぎつけますわ……」

しかしその手は傷だらけの手で優しく開かれた

「それから……お姉さまにはくれぐれもこのことはご内密に……」

「待って白井さん!!」

佐天は一瞬あっけにとられていたが、すぐに正気を取り戻して去り行く後ろ手をつかんだ

「白井さんは一体何をしてるの!?! 風紀委員の仕事なら初春や固法先輩に相談したほうが……」

と佐天の言葉はここで遮られた。原因は佐天の体が突き飛ばされたからである

「きゃあっ!」

多少の痛みはあったものの、佐天は次の瞬間に自分は救われたのだと知る

「逃げまどう子羊よ。貴様はこの場にいるべきではない。諦めて天命に身を投じよ。」

「早速来ましたわね……」

傷だらけの少女は苦痛に表情を歪めながらも目の前に現れた女のよう高い声を放つ男に敵意を向ける

勝てる見込みは限りなく無いに等しい。だが、それでも逃げるわけにはいかない

守りたいものがある限りは少女が屈することはない

そして佐天はその様子を固唾を飲んで見ていた

今、飛び出したところで無能力者である自分にはどうする事もできない。さらには最悪の場合を考えてしまうと命すら危うい

そう考え、佐天は自分に力がないことを呪い、拳を震わせた

「私、生憎そのような運命は信じていませんの。」

弱々しく取り出した金属矢を構えて目の前の男を睨みつける眼光は微塵も諦めは込められていない

しかしその手には力はほとんど入っておらず、立っているのもやっとなといった状態だった

「ならば脚本に変更を加えるでしょう。戦闘シーンを追加、BGMは運命！」

そう言い放った直後、男は強く地を蹴って飛びかかるように攻撃の動作に入る

当然のことながら回避行動をとろうと試みたが、傷ついた足は思うように動いてくれない

動かそうとすれば意図した位置に運ばれることはなく、ふらつき、もつれて、防御すらできない体制に陥る

従って迫り来る男の拳は狙い通りに腹部を的確に捉え、少女の自由を奪う

「がっ……ああ……」

そして流れるように重く鋭い蹴りが放たれ、少女の華奢な肢体をまるで紙屑のように軽々と吹き飛ばし、声すらあげさせることなく佐天とは逆方向の茂みを揺らした

「……さて、次はそこに隠れる子ネズミ。貴様を狩るとしよう。」

不気味な雰囲気をもとう隻腕の男は的確に佐天の隠れる茂みを睨みつけて言い放った

「（ま、まずいよ……完全にばれちゃってる……）」

強力な能力者すらも凌駕する脅威がジリジリと詰め寄っているが、自分は無能力者。どうすることもできずにただ震えるだけ

だが、黙ってやられるほど無能力者 佐天涙子 は弱くはない。震える拳を必死に握りしめ、キッと表情を引き締めると内に潜む恐怖を押し殺して、男に立ち向かうべく立ち上がった

「勝てぬ戦に挑まんとするその意気やよし。」

そう佐天を賞賛しながらも男は隻腕である自身の唯一の腕を振り上げた

「BGMは……」

「待てええええい!!」

しかしそんな時、佐天の右方、男の左方々に突如根性があり余っているような声を轟かせて一人の少年が現れた

11（後書き）

あとがきという眩き

隻腕の男の声は中田譲二さんをイメージしてます（＾ω＾）

12 (前書き)

戦闘シーンをうまく書くコツをどなたかご教授ください (; ∇ ;)

突如轟いた大声に驚いた佐天だったが、現れた少年は佐天を庇うようにして隻腕の怪しげな男の前に立ちはだかった

「……脚本にはないキャストだ。貴様は今すぐ舞台を降りてもらう。」

「脚本？そんなものは今重要じゃない。今重要なのはお前が女の子を襲おうとしている根性の足りていない輩だということだ！！」

そう言って少年は攻撃の構えをとりながら息を吐いた

「見さらせ！これがナンバーセブンこと俺の奥義！」

『すごいパーンチ』

途轍もなく大きな衝撃波が音を立てて飛んだように感じた

だがそれ以上に佐天は少年の奥義とやらの名前にずっとこけそうになっていた

少年の奥義を正面から喰らった隻腕の男は遙か彼方で倒れ込んでいた

まるで人形のように動かない男は異様で異質な雰囲気を放っている
対して自らをナンバーセブンと称した少年は少し強めの向かい風に
逆らいながらもゆっくりと勇猛に男に近づいた

「根性が足りていないな。」

少年は眼前に倒れている男を見下げて短くそう言っていると小さく息を吸った

「まだやるか？ やるといふのなら今度は手加減無しで全力全開だ。」

少年は一応攻撃の構えを見せるが、それに対する男の返答は実に不気味なものだった

「……いいだろう。貴様には過ぎたる役を与えてやろう。無様に転がる肉塊Aだ……」

次の瞬間、少年の前から男の姿が消えた

そこに残ったのは空間がかじりとられたような穴で、それも瞬く間に跡一つ残さずに消え去った

「何だ！？どこへ消えた！」

そう叫んだ少年の体はすでに空中に投げ出されていた

「バカな！？テレポート空間移動だ！？」

そう考える間にも次々と襲い来る敵の攻撃によるものと思われる痛みが少年を襲う

根性満載の少年にとって痛み自体は大したことはない。だが少年の思考はそれについていくことができない

「落ちて肉塊へと成り果てろ……」

そして戸惑う少年の背後から声が響くと、男の踵が少年の脳天に落とされて鈍い音を立てた

「ぐうおあああ！！」

少年の体は公園の地面を紅く染める程の衝撃を伴い、墜落した

しかし

舞い上がる土埃の中にゆらりと一つの影が浮かぶ

その影の正体は少年。常人ならばただでは済まない攻撃を受けても少年の足はしっかりと大地を踏み締めていた

その姿を上空から見つめていた隻腕の男は

「解せんな。その力があのお方の計画の障害になる前に……」

「その命、刈り取ってくれよう……」

再びその姿をくらませた

先程の衝撃波と同量くらいのけたたましい音を立てて墜落してきた少年に佐天は目を奪われていた

少年はまだ戦う意志を見せているが、佐天自身は目の前で起こる出来事に声にならない声を漏らしている

「あの人は一体……」

自分を助けてくれたあの少年は誰なのか、そう考えながら呆然と立ち尽くしていた

「……今のうちに逃げましょう。」

しかし不意に背後から肩を叩かれて振り返った

「ここはアイツに任せて僕と逃げて下さい。」

原谷矢文　と名乗った少年は佐天に逃げるように進言したが、佐天はそれを即座に拒む

「あの人は私を助けてくれようとしてるの！見捨てるなんてできないよ！！」

対して原谷は優しい声で言葉をかけた

「安心してください。アイツは負けません。」

「なんてったってアイツは超能力者《レベル5》の削板軍覇ですから。」

「……いや、やっぱり根性が凄まじいからってことで。」

原谷は劣勢の削板が勝つことが分かっているように佐天に笑いかけた

13 (前書き)

今作での削板と原谷の関係性は悪友って感じですかね（＾ω＾；）

13

「今のは効いたぞ……」

額や体の各所から血を滲ませながらも、削板軍覇 はしっかりと足取りで前に出る

「これは俺も本気を出さないと……」

削板は上空からいつの間にか目の前に降りたっていた男に鋭い視線をぶつけた

その鋭い眼光を維持しつつ削板は深く息を吸い込み、少ししてから右の拳を少し引いて身構える

「アタッククラッシュ念動砲弾の真骨頂を見せてやる。しかとその目に焼き付けろ……」

「すごいパァアンチ!!」

少年の振るった右拳の先端を中心にして公園という名前を持つ広い空間はとてつもない爆音と暴風に包まれた

遠方で羽を休めていた鳥たちすら逃げるように一斉に飛び立ち、数秒後に巻き起こった風に吹き飛ばされる

そして何も知らずに平穏な日常を過ごす人々もいきなり過ぎ去った突風に目を丸くする

佐天と原谷は削板たちからあらかじめ少し距離をとっていたので、耳をふさぎ、身を低く屈めることで衝撃に耐えていた

しかし塞いでいる耳にも届いた爆音と屈めていなければ吹き飛ばされていたであろう凄まじい風が衝撃の大きさを物語っていた

舞い上がった土ぼこりと煙が辺りを包んでいたが、次第にそれは風によってかき消され二人の男たちの姿は再び見え始めた

立っているのは少年で、対面の男は膝を折り肩で息をしていた

「……物語は……まだ終わらぬ……」

男の眼光は削板を見据えながらも意識を保っているのがやっとで、

投石を受ければ気を失う。そんな状態で男は小さく呟くと、いきなり現れた空間の穴に飛び込んだ

「ま、待て!!」

削板はとっさに叫んだが、攻撃の反動から素早く動くことが出来ず、男を取り逃がしてしまった

「くそっ……」

「あ、ありがとうございました。」

「気にしないでいいと思いますよ。コイツが勝手にやったことですから。」

「……オイ原谷、それはお前がいう台詞じゃないだろ。」

頭を下げる佐天とそれを制す原谷、加えて痛みを持ち前の根性で堪えながら笑いかける削板

先程まで戦闘が繰り広げられていたとは到底思えない光景がそこに広がっていた

結論から言うと

白井黒子は見つからなかった

佐天は削板が勝利するとすぐさま白井が吹き飛ばされた茂みに駆け込んだが、辺りを見渡しても白井の姿はそこになかった

あの満身創痍の状態で白井は行ってしまったのだろうか

佐天は心配すると同時に仲間を頼ってくれず一人で戦う白井に憤りを感じていた

「それじゃ、僕はコイツを病院に連れていくんで。」

「待て原谷、俺は病院なんて行かないぞ。根性があればこのくらいの傷なんて……」

「今にも出血多量で死にそうな奴が何言ってるんだよ。その根性が

なかったら今頃お前は死んでるよ。」

そう言って原谷は佐天にここであつたのも何かの縁と自身の連絡先を赤外線で送り、一礼をして削板に肩を貸して病院に向かった

佐天はひとまず白井のことと、削板が撃退してくれた、少なくとも味方ではない男の情報を伝えるべく、風紀委員177支部へとその足に向けた

「ぐうあああっ!!」

痛みから起こる悲痛な声が病院内に響きわたった

想像以上の大声にカエル顔の医者は苦笑いを浮かべる

「よくこの傷で生きていられるね君は。普通ならとっくにこの世にいないほどの出血量だよこれは。」

「そうなっていれば僕が連れ戻すだけだね。」

カエル顔の医者にはこやかだが、どこか力強い表情で言った

「……まあ、君よりもあの少年の方が連れ戻さなきゃならない可能性は高いか。」

だがすぐさまそう呟くとカエル顔の医者は窓から覗く雲を眺めた

そのとき学園都市のどこかでツンツン頭の少年がくしゃみをしたとかしなかったとか

14 (前書き)

合間を縫ってちびちび書いてます (^ ω ^ ;)

今月さえ乗り切れば……

風紀委員177支部で一人パソコンに向き合い、ひたすら目にも留まらぬ早さでキーを叩く 初春飾利 に忍び寄る影があった

音も気配もない。しかし、初春はその影に感覚的に気づいたようでフツと鼻を鳴らした

「甘いですね、佐天さん。二度も同じ手を……」

振り返った初春の目には予想に違わぬ人物が映った

「佐天……さん？」

ニツとシニカルに笑った表情を浮かべながら近づいてくるその姿に初春は違和感、

否、それ以上のものを感じていた

「うーいはっるゝ遊びに来たよ」

「……あなた誰ですか？」

初春は素早く身構え弱々しくも臨戦態勢に入る

「あなたは佐天さんじゃありませんよね？」

初春の眼光は鋭く、突き刺さるように向けられている。そんな初春に驚いた表情を浮かべ

「おっかしいな〜バレるわけがないと思ったのにね……」

その佐天の姿を借りた誰かは呟きながらゆっくりと初春に近づいた

「まあご名答だと思うよ。私は佐天涙子みたいな無能力者じゃないしねん」

そして初春の眼前に立つと怯むことなく、舐めるように初春の頬に指をなぞらせた

「私の名前はね、初春飾利って言うのかもしれないよ？」

初春飾利はその顔をしかめた

自分のすぐ目の前には自分と同じ顔、同じ背丈、同じ服装をした誰かが立っている

そしてその誰かは自分と寸分の狂いもない同じ声で語りかけてくる

初春は自分の声を録音し、それを自身で聞いているような心持ちになった

「あなたの能力自体は脅威でもなんでもない、とるに足りないものなんだけど……」

「あなたの情報収集能力はちょっと厄介なんだよね」

そう言い終わると初春の姿を借りた誰かの表情がたちまち暗く、威圧的なものになった

ゾツと寒気が初春の全身を駆けめぐる

体が勝手に震え始め、その自由が奪われた

「怖い？……大丈夫だよ。しばらく……でいいのかな？」

「眠って貰うだけだからさ……」

そう小さく不気味に囁きながら初春の姿を借りる誰かは懷から何かを取り出した

「あつ、えっ……？」

『それ』を見た途端に初春の体の震えはおさまった

体が震えを忘れるくらいに初春の思考は別のことに捕らわれてしまったからだ

「白井さんの……金属矢……？」

いつも風紀委員として振るわれる仲間の武器

大切な友達の武器

そんな見覚えのある武器は凶器と名を変えて眼前に迫り、いまにも初春自身を傷つけようとしている

だが初春は身の危険すら感じなくなるほど盲目になっていた

「コレはもちろん刺さると痛いよねえ……」

初春のあどけない笑みとは違った偽物の作られた黒く、おぞましい笑顔で誰かは握った矢を振るう動作に入った

「おやすみ初春飾利……！」

バチツと小さく何かが弾けるような音が部屋に響き、二人の少女の間を裂いた

初春の姿を借りた誰かはバツと後ろに飛び、自分の背後を振り返る

「エレクトロマスター発電能力者……」

「……いや、レールガン超電磁砲って言った方が良いかな？」

初春の姿を借りた誰かは珍しいものを見たような表情で軽く口元をゆるませた

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど……」

現れたもう一人の少女はバチバチと体から青白い閃光を走らせる

「それ……どこで手に入れたの？」

御坂美琴は浮かべる笑みの中に様々な感情をはらませていた

15 (前書き)

なんかもう忙しすぎて目が回ってます

(´ω、；)

忘れた頃に更新されてる作品になりそうですね (^ ω ^ ；)

学園都市第七学区には廊下も階段はおろか、窓やドアすらもないビルが存在する

その建物の中で学園都市統括理事長、また同時に魔術師でもあるアレイスター・クロウリー は緑色の手術衣を身に纏い、液体で満たされたビーカーの中で生きていた

その姿は

男にも女にも、

老人にも子供にも、

聖人にも囚人にも見える

ただ確実に言えることはひとつ
彼は人間であるということだ

「ふむ……」

そして彼は目の前のモニターを見つめながら小さく声を漏らす

その原因は

『手駒の一つがイレギュラーによって撃退されてしまった』ため

しかし彼はそれには大して動じることもなく、目を閉じる

「削板…軍覇か……」

彼がそう呟くと隣のモニターがカエル顔の医者に治療されている削板とその姿を欠伸をしながら眺める原谷の姿を映し出す

「……申し訳ございません」

その姿が映し出された瞬間、絞り出すように何者かが声を漏らした

「…あの戦闘は私の計画にはなかった。現段階では計画に大きな狂いは生じていないしな」

アレイスターは声の主に見向きもせず声かける

「申し訳ございませんでした」

女のように高めの声で謝罪を述べた隻腕の男は膝を折った状態を維持続け、ようやくアレイスターは隻腕の男を一瞥して口を開いた

「そこから出てこい」

「むゝ私のお気に入りの場所なのに……」

突然に隻腕の男の背後から似つかわしくない幼い声がしたかと思うと、見かけが小学生ほどにしか見えなく、そして何故か小鳥を一羽頭に乘せた少女が姿を現した

その少女はぴよこぴよこと跳ねるように隻腕の男の周りをクルクル

と回り、そして輝かんばかりの満面の笑みを浮かべて再び口を開いた

「ねークロちゃん。私が行ってこようか？」

「私、あの超電磁砲なら倒せるんじゃないかなとおもうんだけど？
相性もいいし：ま、多分だけどさ」

学園都市第三位の実力者に対しての発言とは思えない少女の言葉、
だがそんな言葉にもアレイスターは眉一つ動かさず、一点にモニター
を見つめていた

「こんなところで闘えばこの教室も、私たち『初春飾利』もただじ
ゃ済まないと思うよ？」

初春の姿を借りた『誰か』はニタニタとした薄ら笑いを顔に張り付
けて美琴に視線を投げかける

それに対して美琴の答えは至ってシンプルなものだった

『無言』

そして余裕すら伺わせる美琴の意に介さない表情は初春の姿を借り
た『誰か』を一気に不機嫌にさせた

「へえ…さっすがは天下の学園都市第三位様!! 私みたいな三下とは交わす言葉なんてないってこと!？」

一度そう言って押し黙った『誰か』は拳を強く握りしめ、小さく漏らした

「お前等みたいな高位能力者はいつもそうだ…私を見くびり、見下し、あざ笑う…」

「……バカにしゃがってエエエ!!」

その瞬間に初春の姿を借りた『誰か』は激昂した

しかしそんな様子を見ても美琴は意にも介さず本物の初春飾利に向けて歩を進める

「聞いてんのか!? テンメエエエ!!」

とそこで初春の姿を借りた誰かはようやく気がついた

怒りで冷静さを欠き、今まで気がつかなかったことに疑問すら覚える

体が動かない……

それどころか
声が出ていない……

自分は叫んでいた気になっていただけだったとようやく気がついたのだ

それが引き金となり怒りはより一層募っていく

今すぐにでも殴りかかりたい
蹴り飛ばしたい

ズタズタに引き裂きたい
悲鳴をあげさせたい
涙で顔を汚してやりたい……

白井黒子の、この金属矢で体中に深い傷を刻み込んでやりたい……

だが、体はそんな意志とは裏腹に指の一本たりとも動かない

決して動いてはくれない

「私の能力は知ってるんでしょ？」

美琴は呆気にとられていた初春の側に寄り、『誰か』には視線を向けないまま淡々と語った

「最初にアンタを初春さんから引き離したのはほんの少しの電撃を

飛ばしただけ…」

そこでようやく美琴は『誰か』に視線を移す

「でもね……それと同時に人体を麻痺させて動けなくするくらいの電撃も放つといたのよ」

意識の外で、痛覚すら感じさせないほどの早さで電撃を繰り出す

そんなことは『ありえない』その一言に尽きるが、実際に自分の体は動かない

「これが…超電磁砲……」

気づけば声は口から漏れだしていた

これが無謀にも学園都市第三位の発電能力者 エレクトロマスター 御坂美琴 に挑もうとした者の末路

初春の姿を借りた誰かは最早悔しいとすら感じることにすらなく

最初から勝てるはずがなかった。

否、闘いにすらならないのだ。

誰もが自分と同じように間違いなく負ける。

そう自分を慰めるだけだった

「言っただでしょ？私がここに來たその瞬間に……」

「アンタの言う『闘い』なんてものは終わってたのよ」

美琴は決して傲ることなく、あくまで闘いに勝利したというように
言い捨てた

16 (前書き)

更新不定期とかそんなレベルじゃないですね（ω、；）

「あんた、名前は？」

美琴の問いかけにも初春の姿を借りた 変身能力者 は何も答えない
変身能力者の体の麻痺はすでに治まってはいるが、動けないうちに
体を縄で縛っているので身動き一つとれない状態にある

だがそれでも変身能力者は美琴と初春に鋭く、怒りに満ちた視線を
浴びせ続けている

その視線は自分が不利な状況にあるにも関わらず、勝者である美琴
をたじろがせ、初春に恐怖を与えるほどである

「……もう一度聞くけど…あんたは何者で、何の目的で能力者を襲
うなんてことをしているの？」

警戒する美琴は若干身構えながら変身能力者に問いかける

しかし能力者と美琴が口にした瞬間に黙り込んでいた変身能力者は
声を荒げた

「黙りやがれ！学園都市に飼い慣らされた犬のくせに！！」

「私はアンタみたいに自分の能力を笠に着たクズが、……いや、学
園都市にいる奴全員が大嫌いなんだよオ！！」

偏見に満ちた罵声を浴びせる変身能力者の姿に美琴は怒りや反感で

はなく、まったく別のモノを感じとっていた

「その言いぐさだとあんた、学園都市に恨みでもあるみたいね」

「……一体何があったの？」

美琴は変身能力者が放つ荒々しい言葉、『学園都市』や『能力者』という単語に対して異常なまでに苛立ちを見せることに違和感を感じていた

そして美琴はそれがどこから来るのか知りたくなった

「み、御坂さん！？何を!？」

美琴は変身能力者に近寄り、その縄を解く

その行動に驚く初春だったが、それ以上に驚いているのは変身能力者だった

変身能力者は己を縛る縄が解けたその瞬間に身を翻し、美琴から距離をとり

「後悔するよ？ここでアタシを逃がしたら……」

敵意を剥き出しにして美琴を鋭く睨みつけた

「そうですよ御坂さん！折角の白井さんへの手がかりなのに！」

しかしそれを目にしても、初春の言葉を耳にしても美琴は態度を変
えることはなく、変身能力者に質問を投げかける

「答えて、あなたは どうして 通り魔 みたいなことをするの？…学園
都市に何の恨みがあるの？」

柔らかな口調ではあったが、美琴の言葉には妙な重みがあった

優しく諭すような声色で、しかしどこか厳しくもあるその言葉に変
身能力者だけでなく、初春も押し黙った

「……………」

変身能力者の目は未だ敵意に満ちていたが、静かにその口が開く

「私は…私という能力者は学園都市の統括理事長 アレイスター・
クロウリー を殺す為だけに存在するのよ」

「アイツは私からすべてを奪った。だから私も奪ってやるのよ……
アイツの命を……」

そう語る変身能力者の表情は先程美琴に向けていた表情よりも遙か
に怒り、憎しみに満ちていた

17 (前書き)

キャラにどんな名前を付けようか迷いながら書きました（＾ω＾；）

おそらく実在していないはずです…

しのめこやめ
東雲小雨

という無能力者の少女がいた

その少女は自分に何の能力も芽生えなかったことを常日頃から疑問に思いつつも

「いつかはきっと報われる日が来る…」

そう信じて毎日毎日授業をまじめに受け、努力してきた

だが、そんな少女の努力は報われるどころか仇となってしまう

東雲は自ら志願した教師との居残り授業で下校が遅くなり、暗い夜道を下校していた折に能力者達に襲われてしまった

そして気がつけば夜が明けて朝になっていた

ここで何があったのか、自分はここで何をされていたのか

何も覚えていない

何も思い出せない

何も思い出したくない

東雲はあちこち破れ、乱れた衣服を整え、流れ出した涙を拭って家路についた

もちろんアンチスキルに相談し、東雲を襲った下手人は捕らえられた
だが、本当の悲劇はここから始まる

被害者の東雲に学園都市の上層部は保証として特別な能力開発を施すと申し出た

ずっと望んでいた能力が手に入る

「ようやく…報われた」

少女は学園都市の誘いに乗った

こうして東雲は唯一無二の能力を手に入れた

その名を『プリントミラージュ幻影投影』といい、

その能力は一度触れたものを別のものに投影すること

他者の姿を自分に投射することも出来れば、自分の姿を他者に投影することも出来る

また、扉に壁を投影したり、一度触れたものであればそこにないものをまるでそこにあるかのように見せることが出来る

希少で東雲のみが持つこの能力は維持、調整が随時必要とのことで東雲は学園都市の管理下、暗部組織に身を置くことになった

だが、これを東雲から聞いた彼女の両親が許すはずもなく

東雲の両親は学園都市に彼女を解放し、手元に返してほしいと要求

サンプルを手元に置いて研究を続けたい学園都市と身を案じる両親の意見は対立し双方の協議が始まった

そんな両者の協議は長引くと思われたが、

東雲の両親を含めた親族が学園都市に向かう途中、谷に転落するという事故が起こり全員死亡

東雲にとって家族は何よりも大切なもの、いわば東雲自身のすべてだった

そんな家族を奪った事故の詳細が知りたい

そう思った東雲はすぐに学園都市に警察へ再捜査するよう依頼してほしいと嘆願した

だが学園都市から来た返答は「許可できない」というもので、それは外部との深い接触は控えたいとの理由からだった

代わりに支払われた多額の見舞金と繰り返された能力開発も東雲の心を癒すことはなく

愛する家族を、自分のすべてを学園都市に奪われた

学園都市は実験を続けるためなら、人の命さえも犠牲にする邪悪な存在

そんな思いが募るようになった

東雲小雨は次第に変わっていった

能力を手にしてしまったがために家族を失ってしまった

家族を奪った学園都市が憎い

能力を与えた学園都市が憎い

能力開発が憎い

能力を誇る高位能力者が憎い

能力者が憎い

学園都市統括理事長アレイスタークロウリーが憎い

復讐してやる

期を待ち、必ず殺してやる

そのためにはどんな苦痛も耐えてみせる

それが大切な友を失うことであろうとも、東雲小雨でいられなくなってもかまわない

学園都市の犬と呼ばれ、蔑まれようがかまわない

復讐を遂げる日まではアレイスターの犬になってやる

だが、決して飼い慣らされたりしない

隙を見つけて喉元を噛みきってやる

いつの日か…絶対に

少女はそう考え、生きるようになった

18 (前書き)

皆の関心がオリアナに向いていますが、私は断固吹寄推しです
(´ω´) フンス

だって中の人

藤村歩さん

だから (´ω´)

上条と固法が戻った時には東雲の姿はすでになかった

さらに言うところには美琴と初春の姿もなく、残されていたのは一枚のメモだけ

固法が手に取ってみるとそこには住所と

『黒子が捕まっている』

と走り書きの文字が並んでいた

「さっきから走ってばかりですね俺たち…」

「…そうね」

若干スタミナ切れの少年と少女と表現すべきか微妙なラインの女性は嬉しい知らせにも関わらず素直に喜べなかった

「……あ、そうだ！」

軽くため息をつきながら出口へと向かっていた固法の表情がほんの

数秒前とはうって代わり、何かひらめいたように表情が明るくなった

「悪いけどちょっとの間ここで待っててね」

固法はそう言って部屋の中へと入っていく

上条が居るのは固法の寮の一室

固法の同居人は不在のようで、上条は一人部屋に取り残された

特に何もすることのない上条がぼんやりと待つこと十分ほど

「上条君、お待たせ」

上条の前に再び現れた固法は手に何かを持っていた

その何かを確認しようと上条が目細めしているとその何か次第に大きくなっている

……のではなく、固法が持っていた物体のうちの一つを投げ渡してきていたので上条の眼前にその何かが近づいていたただけなのだが

時すでに遅し

「…んがっ！」

上条の顔面にその何かは激突し、一度上昇すると重力に従って見事に上条の手に納まった

「さ、行くわよ」

投げたあとすぐに後ろを向いていたので、上条がダメージを受けていることなど全く気づいていない固法は振り返ってそう言い

上条の目に若干の涙が浮かんでいることに疑問符を浮かべた

対する上条はというと、手にしてみても初めて一体それがなんなのか理解する事ができた

それは上条本人にはあまり馴染みのない、バイク用のフルフェイスヘルメットだったのだ

「固法さんバイク乗るんですね」

「意外だったかしら？」

上条は風を切りながら走るバイクの後部で口を開く

「意外と言えば意外ですけど…なんとなく似合ってますよ」

緊張感の欠片もない、他愛のない会話をする二人

そんな雰囲気で見られるのも既に美琴と初春が白井の救出に成功しているであろうと確信していたからである

だがそんな雰囲気は固法の携帯に届いた一通のメール

そのメールに添付されていた画像によって跡形もなく崩れさってしまふ

白井の捕まっているという建物の前までたどり着き、バイクから降りたその瞬間に固法のポケットが振動を始めた

固法はポケットから携帯電話を取り出して届いたメールをチェックする

そしてその表情を驚きに染める

「…っ!？」

その様子に気づいた上条が問うと、固法は無言で携帯の画面を上条に見せた

「これは……」

そこには一人の女子中学生の姿

柵川中学の制服を着た佐天涙子が拘束されている姿が写っていた

19 (前書き)

さてさて三が日も終わりましたが皆様いかがお過ごしでしょうか
(^ω^)

遅ればせながら

あけましておめでとうございますm ((m

今年も本作をよろしくお願いいたします

まあ、更新は不定期でなかなかされませんがw w

数時間前、削板たちと別れた佐天涙子は初春らが待っているであろう177支部に向かっていた

無論その頃の177支部は大変なことになっているわけだが、そのようなことなど佐天は知る由もない

「ふう：なんだか疲れちゃった」

間近で美琴とはまた違った超能力者《レベル5》の激しすぎる戦闘を目撃した佐天に幸いにも恐怖心はなく、あるのは驚きと言いやうのない疲労感だった

「：何か飲もうかなあ」

今いる通りから少ししたところにお気に入りのお気に入りのジュース（佐天曰く神、初春曰く死神）を販売している自動販売機があることを知っていた彼女は喉の渇きを癒そうと、ただ軽い気持ちで人気の少ないその場所へ足を踏み入れた

彼女がちよっとした異変に気づいたのは取り出し口から缶ジュース

を取り出そうとした時だった

少しばかり取りにくかったために体勢を変えて再挑戦しようかと試みて、足を数センチ動かした

するとパシヤツと水の跳ねる音が聞こえたのだ

さらに言うとその音は佐天自身、佐天の足が水たまりに踏み込んだために鳴った音だった

「水漏れ…かな？ 自販機の故障？」

しかし専門家ではない佐天にそれを調べることは出来ず

「まあ…いっか」

佐天はその場をようやく手にした缶ジュースを持ち、去ろうとした

その時

足下の小さな水たまりが突如轟音と共に一瞬だけ柱のような形となり、佐天の体を濡らした

そして彼女は気づく

これは能力者の仕業なのだ。と

「誰！？こんなこととして楽しいわけ！？」

怒りのままにあげた声に呼応するように嘲笑しながら一人の少年が姿を現した

「んゝ楽しくはないですねえ…特に女性をビシャビシャに濡らすなんてマネは…」

軽々しい口調で話す少年は制服が濡れてしまったことで露わになっている佐天の下着へと視線を注いでいる

「へっ、変態！！こっち見るな！！」

バタバタと暴れだした佐天に少年は慌て始め、收拾がつかないと判断したのか深くため息をついた

「んゝまあ、仕方がないですかねえ…手荒いやり方もやむなしってことで…」

そう呟く少年はひざを折って地面に手をつくとき、自身の能力でさながら川のようにずぶ濡れの佐天の体まで水を繋げた

「少しだけ眠っててもらいますかねえ」

少年の言葉の後に発せられた一瞬の瞬きと共に佐天の意識は途切れた

「んゝ佐天涙子さん僕は紳士なんですよ。だから貴女を優しくエスコートしたかっただけなんですよねえ…」

「んゝまあ、こうなることも見越して貴女をずぶ濡れにしていた訳ですが…」

そう見え透いた下心をちらつかせた自称紳士の変態少年は佐天の体をおんぶして自分の隠れ家に向かった

20 (前書き)

短めではありますがようやく書くことができました
(|| ω ||;)

私は佐天さんを使うのが下手なようです W W

「んっ……ああ、そうか……」

佐天はゆっくりと瞼を開いたものの、未だ頭がぼんやりとしたまま
で何をするわけでもなくただ時間を過ごした

それから数十分経つとようやく意識がはっきりしだしたので、一度
深呼吸をしてから辺りを見渡し始める

どうやら室内であることは間違いないようだが、窓が見当たらない
ことから地下室である可能性は捨てきれない

そして佐天自身の体は椅子に座らされ、手を後ろやった状態で、さ
らにはロープで縛られている

手首の辺りがずっしりと重いことから鉄製の何か、おそらくは手錠
の類がかけられていることだろう

足に拘束具は付けられていないようだが、椅子の足が高すぎて佐天
の足が地に着いていない

足をバタつかせて倒れ込むことは可能だろうが大きな音により敵に

気づかれてしまう可能性が高いだろう

そこまで考察すると、佐天は小さくそして軽く息を吐いて

「はぁ……不幸だなぁ……」

どこかの少年のお株を奪う発言をした

先程現れた少年は恐らく水を操る能力者。もちろん自分の味方などではない

水で佐天の全身をずぶ濡れにした後、持っていたスタンガンが何かで感電させられたのだろう

そうして気を失ったところ誘拐されてしまったというわけだ

思い当たる節がまったくないわけではない。自分は学園都市の第三位あの名高き常盤台中学の超電磁砲^{レベルガン}の友人なのだから

レベル5に無謀にも勝負を挑んで名を上げようとする輩はいくらで

もいるのは事実

そしてその中でも御坂美琴は女子中学生ということもあり標的にされやすい

その友人たる佐天は美琴に近づくために人質として利用されるのだと理解していた

時々佐天は嫌になる

それは友人である美琴の私闘に巻き込まれることではない

粹がって闘いを挑み、瞬殺される能力者の無様な姿をみるのが嫌になるのだ

したがって佐天が思うことは…

「床…冷たいなあ…」

恐怖などでは断じてない

理由はどうあれ佐天は誘拐されてしまったわけである

未だ爆発しそうな感情を必死に抑え、下手人であろうあの少年のことをゆっくりと思い出しはじめた

体格は細身で華奢といえる。年齢はおそらく同年代かそれ以下

能力は水を操る系統のものだろう

従って電撃により気絶させられたとはいえ、電撃系統の能力者ではない

水と電撃の両方を操ることは不可能。学園都市の能力者は二つ以上の能力、デュアルスキルを持つことはあり得ないはずだからだ

あり得ないと分かっている佐天は引っかかっていた

あの時地面に手を着いた少年の手はスタンガンなど持っているようには見えなかったのだから…

21 (前書き)

なんだかんだで卒業式当日です (|| ω ||)

あっという間の三年間だったなあ……

ま、本編にはまったく関係ないんですが W W

それからしばらくするとカツカツと小気味よい足音が佐天の耳に届き始めた

「んゝお目覚めのようですね佐天涙子さん」

現れたのは先程とまったく変わらない姿の似非紳士の少年

「まだ名乗っていないことをふと思い出しましてね。私は 呉郷理くれさと性 と申します」

呉郷は似非紳士らしさを演出するために片手に携えていたコーヒークップを置き、佐天の前までゆっくりと歩を進める

「一体どういうつもり？こんなことしたらただじゃ済まないと思うけど？」

不利な状況にも関わらず佐天は声に少し凄みを持たせて言い放った
しかし呉郷は飄々とした態度を崩すことはなく、そればかりか佐天の後ろに回りこみ髪を撫で始めた

「綺麗な髪だ…そう。これはまるで……」

そこまで言うとは呉郷は黙り込んだ

しばしの沈黙が続き佐天も違和感を覚え始めた時

呉郷が新たに口を開いた

「なあオマエ、俺のオンナになれよ」

呉郷は口調をガラリと変えて佐天に話しかける

そして先程まで優しく髪を撫でていた呉郷の手は佐天の胸部へと向かう

「ちょっと!?! 何考えてるの!?!」

「黙ってろよオンナ、オマエは黙って受け入れろ」

これまでに感じなかった恐怖が佐天の中にこみ上げる

「や、やめて!」

声からは先程の凄みが完全に消えて恐怖から声が震えだしている
そんな佐天の嘆願の言葉を聞いて呉郷はニヤリと口元を緩ませる

「タ・ノ・ミ・カ・タ」

「わかんねえか……なあ？」

背筋が、全身が凍り付いてしまったかと思え錯覚した

呉郷の言葉は佐天の脳裏に、心に一瞬で刻み込んでいった

今の呉郷に逆らえば何をされるか分からない

最悪の場合

殺されるかもしれない……と

「……声出すなよ？ どうなっちまうかわからねえゾ？」

そう言った呉郷の手は再び佐天の髪に伸びる

「……オイオイちよつと待てよ。今は俺のターンだろ？」

「大人しくしてろよ髪フェチ野郎」

佐天は先程とは違った恐怖を感じていた

先程からこの男は一体誰と会話しているのか

推測するにそれは似非紳士の呉郷理性に思えた

しかし辺りには誰も見当たらない

だがこの男は他の誰かと話しているようにしか思えない

「貴方は…誰なの？」

佐天は残る恐怖を抑えて恐る恐る口を開く

対して呉郷は佐天の疑問に即座に答える

「俺か？俺は呉郷理性サマだよ。自己紹介は済んでなかったのか？
…っつか他の誰に見えるんだよオンナ」

呉郷の答えから佐天はある仮説を導き出した

「さっきまでの呉郷君は何処に行ったんですか？」

呉郷の答えは：佐天の予想通りだった

「ハア？ 決まってるだろ。ココだよ」

呉郷は自分の頭を人差し指で二度叩いて見せた

22 (前書き)

段々と書く速度は落ち、更新感覚は開いていく……
(ω、;)

「一体何処に向かってるんですか？早くアンチスキルに連絡しないと！」

再び二人はバイクに跨り走り出していた

ヘルメットをしているが故に上条の声は少々籠もって聞こえているが、意味が通らないほどではないだろう

しかし固法はそんな上条の言葉に反応せず、ただひたすらに考察を続けているようだった

「佐天さんが捕まっているのはきっと第一九学区のあの場所…」

「固法さんっ！！」

上条の怒号にも近しい呼びかけによってようやく固法は上条の言葉に耳を貸す

「あっ、ごめんなさい。何かしら？」

「何って……アンチスキルに連絡しないんですか！？」

上条の言葉に固法は表情を曇らせて見せた

「上条君、私の携帯が右ポケットに入ってるから…もう一度あの画像を見てみて」

時と場所を選ばない上条さんのラッキースキルは非常時でもお構いなし

上条の右手は幾度か狙いの固法の携帯電話ひいては右ポケットから逸れて固法の内股を攻めたり、左手で固法の腰を掴んでいたが曲がる際に誤って胸を掴んでしまったり……

そしてそのたびに固法が小さく声を漏らしていたのだが、走るバイクの轟音にかき消されてしまい、上条の耳には届くことはなく気づくことすらなかった

結局信号で停止した際に若干頬を赤らめた固法自身が携帯を取り出し、上条はそれを受け取った

再び画像を見ても上条には少女が、固法や美琴の友人であると聞かされた人物がどこかに捕らわれているとしか情報を得ることは出来なかった

そう正直に上条が告げるとちょうどバイクは赤信号で止まり、固法が口を開いた

「佐天さんの姿に気を取られがちだけど、後ろの壁に紙が貼ってあるの、画像の端で白いから分かりづらいけれど…」

言われるまで上条は気が付かなかった…

確かにそこには紙が貼ってあり、ボールペンと思われる細さで字が綴ってあった

『警備員に連絡すれば命はない』

「…無理もないわよ。これは印象操作の一種だし、訓練を受けてなかったら佐天さんにしか目が行かないでしょうから」

固法は徐々にスピードを落としながら上条に話す

「特にここ一九学区の廃ビルには実験によって新たな人格を植え付けられた能力者が住み着いてるって噂があつて……」

「さっきの画像を見る限りでは資料にあった部屋と佐天さんが捕まってる部屋が似てるのよ」

「可能性は高い…か」

意を決して上条と固法が廃ビルに入ろうとした時

「…！？伏せてっ！」

目的の廃ビルで突如爆発が起こり、周囲に轟音が響きわたった

「あっ……ああ……」

佐天は恐怖に怯えきっていた

目の前で呉郷は突如爆発を引き起こした

察するに水蒸気爆発か何かだろうが、問題はそこではない

呉郷は手のひらから水を発生させると地面に出来た水たまりに手を着き、電気を操って水を分解したのだ

通常学園都市の能力者には一つしか能力は芽生えない

デュアルスキルと呼ばれるソレは理論上ありえないのだ

しかし、佐天は見た

目の前で水と電気の二つの能力を操る姿を

「どう……して?」

「何だよオンナ、そんなに驚くことないだろ?」

「僕には」「オレには」

声がぶれている

まるで二人が全く同じタイミングで話しているようだ佐天は感じた

ただ目の前で口を開いているのは一人

呉郷理性と名乗った少年だけだ

「「多重能力者ですから（だからな）」」

23 (前書き)

時間が…とれないッ
(
ω
;
)

23

かつて学園都市ではある仮説がたてられていた

自分だけの現実を個人に複数持たせてみると能力が複数持てるのではないか
パーソナルリアリティ

簡潔に言うとは多重人格者ならば一人格につき一つの能力が得られるのではないか

置き去りの子供達モルモットは学園都市に余りある

自らの知的好奇心を満たすために、学園都市にさらなる繁栄をもたらすために科学者達は実験を開始した

だが、結果は悲惨なものだった

置き去り《チャイルドエラー》10人に人工的に人格を植え付けるため学習装置テストメントの改良型を使用したのだが、実験途中に脳が破裂したり、言語使用が不可になったりと半数を行った時点で成功する見込みはないと判断され実験は闇に葬られた

だが、この時科学者達は気づかなかった

ただ一人だけ実験に成功し、人工的に人格を植え付けられた少年がいたことを

数年後、少年はその存在に気づいた

突如声が聞こえるようになったのだ

辺りには誰もいない

でも声がする

自分を呼ぶ声が

どこから聞こえるのか……

答えは頭の中だった

少年は気づかぬ内に自分で言葉を発していたのだ

自分自身と会話するという行為はあまり気持ちのよいものではなかった

しかしその対話により少年は自分が多重人格者なのだと気がついた

「僕の名前は呉郷、呉郷理性です。貴方の名前を伺ってもよろしいですか？」

「バカじゃねえのか？オマエはオレでオレはオマエだろうが」

「じゃ、貴方の名前って……」

「呉郷理性だ。文句あるのかよ？」

呉郷は少し笑みをこぼした

「僕は貴方で貴方は僕ってことですか、なるほど……」

「そういうこった。よろしくなオレ」

「ええ、よろしく願いしますね僕」

呉郷の右手と左手がガッチリと握手を交わした

呉郷は多重人格者であること以外は普通で至って平凡な少年だった
友達もそれなりにいたし、成績も中の上、レベルは3の水流操作ハイドロハンド
しかしこれはあくまで表の呉郷理性の能力であり、裏の呉郷理性に
も能力があったのだ

レベル4の発電能力で呉郷自身は雷鳴放出サンダーボルトと呼称していた

月日が経ち、隠すことが億劫になった呉郷はある日友人に打ち明けた
その友人は単純に羨望の意を呉郷に向けたが、その事実はたちまち
全校生徒に知れ渡り、学校外に漏れた

すなわち実験を行っていた科学者達の耳に届いてしまったのだ

呉郷は抵抗した

しかし、対能力者戦闘に長けた装備の前には手も足も出ず呉郷は科
学者達の管理下の暗部組織に身を置かざるを得なくなった

平穏な日々を失った呉郷は堪え忍ぶことを選んだ

いつか解放されることを願い、それまで生き延びようと

逆らって殺されないようにしようと…

24 (前書き)

諸事情でしばらく離れていたんですが、開き直って再び書いてみようかと戻って参りました

もしもこの不定期な拙文にお付き合い下さるのなら幸いですm(_____)m

美琴たちは扉の前にいた

無駄に豪華な装飾が施され、散りばめられた宝石が照明の光を反射している

「ここに白井さんが……」

初春は緊張した面持ちで扉に手をかけた

次の瞬間に初春の視線は真っ暗になった

そして彼女自身それが美琴に抱きしめられているからだと悟るのに多少の時間を要した

「!?!」

言葉に成らず悶える初春、そしてそれに応えることなく

美琴は苦悶の表情でその場に崩れた

美琴の背には何かが刺さった痕があり、そこからはもちろん出血もある

初春は絶句した

あの一瞬に何が起ったのか自分には分からなかった

しかしこの 超能力者《レベル5》は一瞬のうちに敵の攻撃を察知し、身を挺して自分を守ったのか……

そこしれぬ壁を感じた

絶望にも似た感覚が初春を包んでいく

これが同じ人間なのか？

レベルの違いは能力だけではなかった

それが妬みなのか初春にも分からない

ただただ愕然とする初春の思考は白く塗りつぶされていく

ふと声が聞こえた

初春の耳に直接届くようなその声は長年付き添った相手のようにとても心地よく、初春の脳裏に焼き付くように言葉を残しては消えて

いく

ソイツハオマエヲワラツテイルンダヨ

テイノウリヨクシャノクセニジャツジメントナンテナマイキダツテナ

イマダツテソウヤツテオマエヲマモツテヤルコトデマンゾクシテル
ノサ

ヨワイクセニハデシヤバルカラアブナイメニアウンダ

ソンナヨワイヤツヲマモツタワタシカツコイーッテナ

ナメラレタママデイイノカ？

イマナラヤレルゾ？

ナアニカンタンナコトサ

ソイツノクビヲオモイキリシメテヤレバイイ

ギューツトゼンリヨクデナ

ソレガデキナイナラ……

「その窓から落としてしまえ」

初春はその声に従ってしまおうかと思った

頭がボーッとして判断が付かない

ただ分かるのは自分が低能力者でコレは高位、しかも学園都市第三位の能力者

妬ましいという思いがないわけでもない

本当はコレは自分を卑下し、笑っていたのかもしれない

やってやる……

今なら勝てる

学園都市の第三位に

あの……御坂美琴にッ……

しかし初春はハツとした。今、ここで倒れているのは誰か

超能力者《レベル5》 それは間違いない。ただ彼女は、御坂美琴は初春飾利の大切な友人なのだ

「御坂さん!!」

応急処置を終えた初春は安堵していた

初めての行為であったこともそうだが、思ったよりも美琴の傷は浅くすぐに目を覚ましたことの方が大きい

「御坂さん、本当によかつ……た……」

安堵からくる涙が初春からこぼれた

そして美琴はそれを優しく拭う

「私は大丈夫。もう少しだけ、あと少しだけ休んだら黒子を助けに行きましょう」

その美琴の言葉に初春はまた叶わないなと思うも、黒い感情は微塵も残っていないかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9371k/>

とある少女と能力者狩り事件《スキルハント》

2011年8月16日06時00分発行